

出でざるべし。東國史略は權近、李詹、河崙等が王命を奉じて撰し太宗王三年八月に成りし書にして三國史記を取りて撰輯せる編年史なり。一に之を三國史略と稱すといふ。小生未だ此書を見ず。此外に東國史畧或は朝鮮史畧と稱する書に柳希齡の撰と傳ふるものあり、柳希春の撰と傳ふるものあり。小生嘗て撰者の名を記せし此種の書を見しことなし。現今流布する朝鮮史畧は六卷あり。檀君より高麗末までの編年畧史にして朝鮮の「十八史畧」とも稱すべきものなり。權近等の撰みし書とは全く別異なり。前記二柳のいづれか一の撰なるべきか是亦明自ならず。撰者全く不明なり。此書萬曆四十五年支那にて刊行せしことあり。四庫全書中に入りし唯一の朝鮮史籍なり。明の東援將士が携歸せしものなるべきか。朝鮮にも刊本あり。東國史畧と題せり。日本にても文政五年昌平覺にて明刊本を底本とし朝鮮刊本を參照して刊行せし

を以て廣く行はれしが今や其書稀少となれり。

(以下嗣出) (大正五、九、二)

## 臺灣旅行談

文學博士 内田 銀藏

臺北に於て臺灣勸業共進會の開催を好機とし、帝國の版圖に入りてから二十年の臺灣を一度目撃して置いて、最近時に於ける日本の發展の歴史を攻究する上の一助にせんと思ひ立ち、私は本年四月十六日に京都を發し、同日神戸出帆の因幡丸に乗り、二十日未明に基隆港に着、其の朝直ちに臺北に到り、それより二十九日迄臺北及臺南に滞在、二十九日の午後基隆出帆の信濃丸で歸途に就き、五月三日の朝、神戸に着、即日京都に歸つた。私の臺灣滞在は甚だ短く、且つ臺北及臺南の二大都市を割合に緩々と視察したゞいで、其の他に及ば

ないから、固より十分に臺灣を理會するには至らない。併し兎に角此の旅行中の見聞に就いての感想の或るものを左に聊か申述べやう。

現今、内地と臺灣との間には、日本郵船會社及大阪商船會社の六千噸型の汽船の定期航海がある。私の乗つたのは、往復共に郵船會社の船であつたが、往航の因幡丸は船室の配置など、私が明治三十六年の春、歐羅巴へ參つた折に乗つた丹波丸と誠に能く似て居るので、乗船すると直ちにそれに心附き、忽ち往年の歐洲行のことを想ひ起した。其の聯想があつたからかも知れないが、船が基隆の港に着いて、上陸した折、前後左右を見廻すと、何となくマルセイユに來たやうな感じがしたことである。勿論基隆は基隆、マルセイユはマルセイユで各別であるが、自分の臺灣到着の第一印象は、實に右の如くであつた。また實際基隆は日本内地の港以上に歐洲式なる所がある。

基隆から汽車に乗つて臺北に到る間、私は成る程南國だなど感じた。私は豫てから臺灣は中々活氣があると聞いて居た。また臺灣は新植民地である、我が帝國の版圖に歸してから日尙ほ淺いばかりでなく、土地の開け始めたのが、誠に新しいことであるから、新開國の氣分が能く現はれて居るだらうと想像して參つたことである。然るに此の汽車中に於て、或る程度迄自分の豫て懷抱して居つた考へを修正せねばなるまい乎といふ感が起つた。成る程臺灣は植民地的である、活氣のある一面もある、併し何となく舊邦の趣もあるし、また沈滞の氣分もある。活潑又はハイカラ的ともいふべきものと共に、何となく柔かな氣味合ひ、或はまた *flowy* になり易い傾きが存するのではない乎と疑はれた。而して是れは蓋し氣候の影響が大に關係あること、思ふ。また一には現住民の大部分が南支那の舊文明を繼承保留して居るからでもあ

らう。或は又其の他にも原因があるかも知れぬ。

臺北は現に全島政治の中心たる點に於て内地の東京に比すべく、臺灣の舊都たる臺南は之を京都に比することが出来る。さうすると基隆は横濱、打狗は神戸に當ると申すべき歟。併し臺南・打狗間に大阪に當るべき大都市はない。而してまた地勢・氣候の上から云ふと臺北は却て京都に似、臺南は寧ろ東京に近いのである。臺北は四方殆んど山を以て圍繞せられたる平原の中に在つて、海の影響を受くることが割合に少い。私は臺北の測候所へ參つた折、所長近藤氏から此の事を注意され、測候所の屋上に登り、四方を眺望して、形勢を大觀し、如何にも其の通りであることを感じた。臺南では、臺南中學校の樓上、並に赤嵌樓の上から見晴らし、如何にも海氣の能く通ずることを覺わ

た。

臺北の新市街は、區劃井然、街路廣濶にして頗

る清潔、殊に官衙等の建築は如何にも宏壯であるが、艦舩及大稻埕に至ると、場所によりては餘り清潔とは言ひ難い所もある。私は臺北に着くや、先づ臺灣神社に參拜し、それから共進會及總督府に屬する研究所、測候所、國語學校、中學校、其の他を參觀し、また艦舩の祖師廟・龍山寺、大稻埕の城隍廟・媽祖宮等に參つた。臺南では先づ北白川宮殿下御遺跡所を拜し、文廟・開山神社・開元寺・赤嵌樓等に至り、臺南中學校及公設市場なごをも參觀した。此等一々の場所に於ける見聞のことは今は略する。

私が最初基隆に着いた時の感想、及基隆から臺北に至る汽車中で感じた所は、既に前に述べたが、それでは臺北及臺南の市中を見物して得た印象は如何といへば、それは要するに種々なる文明の型式の併存である。臺灣に於ける新しい設備には、歐洲文明の型式が頗る純粹なる儘で能く現はれて

居る。それと同時に臺灣に於ける内地人は多くは内地に於けると同様の生活を爲し、茲に現代日本式の文明を移植して居り、而して臺灣本島人の多數は依然として舊慣を守り、南方支那近代文明の型式を示して居る。此の三様の文明の外に尙ほ蕃人の原始的文明がある。今や同化融合は漸く行はれつゝあるが、未だ甚だ進み居らず、種々なる文明の標本が雜然として茲に併存して居る、是れが臺灣の現状である。

臺灣の現住人口は明治三十二年末には二百七十五萬餘人であつたものが、大正三年末には三百五十九萬餘人を算し、十五年間に三割の増加を來して居るが、在住内地人の數は明治三十二年末に三萬三千餘人であつたものが、大正三年末には十四萬一千餘人に達し、其の間の増加は著しいことである。併し乍らかやうに内地人の數が増加し來つたとは云へ、大正三年末に於て内地人は島内現住

人總數の三・九パーセントを占むるのみで、其の九二・パーセントは所謂本島人である。其の外に蕃人が三・六パーセント、外國人が・五パーセント居るといふ割合である。然らば其の現住人口の九割以上を占むる本島人は如何といふに、申す迄もなく素と福建又は廣東、即ち南支那からの移住民の後裔であつて、今猶は大體に於て南方支那の風俗習慣及信仰を有して居ることである。此の大多數の本島人、並に原始的なる蕃人を日本風に同化せしむる事の可能・不可能に關しては種々の意見があるやうであるが、私の見る所では極めて急激に且容易に同化せしめ得べしと考ふるのは恐らくは當らず、また同化は絶望なりと速斷するは、深く思はざるもので、眞理は二者の間にあるだらうと考へられる。私は徐々には必らず同化せしめ得べしと思ふ、遣り方によつては衣食住や言語のみならず、思想・性情に至る迄も割合に速に同

化が進行するだらうと考へる。それには教育の普及と民族間相互の理會とが大に關係がある。之に就いては色々細かに論じなければならぬことがあるが、茲には暫く省畧する。

臺灣在住の内地人は能く暑熱に堪へ、中々活氣のある人が多い、永年在住して元氣益々旺盛に見受けられた人もある。併し乍ら他の一方に於て私はまた永住の考を有する人が少いといふ話、及臺灣では早老の傾がある、又兒童は早熟のやうだとの説を聽いた。臺灣に於ける兒童の發育に就いては、水科七三郎氏は數年前に其の研究の結果を發表せられたが、此の早熟早老の問題は頗る考慮を要することと思ふ。同時に臺灣の如き炎熱甚しき地に於ける内地人の保健及活力増進は、永遠の成功を期する上に大關係がある、其の爲めには熱帯病の研究など、共に、如何なる衣食住の遣り方が風土境遇に適するかを十分に考究することが、

また甚だ必要であらう。

前陳の如く現今の臺灣に於ては、種々なる文明が雜然として併存して居るが、早晚此等の異りたる文明は互に相融合混一することであらう。其の時期の遲速、融合の程度、及結果は、色々なる要因の働き方如何によつて、どうなるか、今より遠かに豫測し兼ねるが、融合混一の次第に進行することは疑を容れない。而してかくして發展する臺灣文明が更に他に及ぼすべき影響、殊に日本内地に及ぼすべき影響は如何なるものであらう乎。今の所謂本島人、及今の所謂蕃人の子孫は新なる日本人となり、本島人又は蕃人と内地人との間の雜種人も次第に出來、純粹なる内地人の子孫も、異りたる風土に生れ、異りたる境遇の下に成長するより、自から或る特徴を具ふる植民地的日本人となりはしまいかと思ふ。かやうな要素より成り立つべき將來の臺灣人の進境果して如何、また此等の

臺灣人が日本内地の社會に及ぼす影響は果して如何なるものであらう乎。而してこれは臺灣ばかりではない、朝鮮に就てもまた同様に考慮を要することである。私は領土の擴張、植民の發展に伴ひて生ずる新なる日本人が如何なるものになるか、又彼等が舊日本<sup>(1)</sup>の社會に及ぼすべき影響如何は、大に考究を要する重要問題であると従來から思惟して居つたことであるが、臺灣に參つては愈々痛切に之を感じたことである。

(一) 水科七三郎氏述「臺灣に於ける兒童の發育」(大正二年三月以降發行の「臺灣統計協會雜誌」第八十六號以下、第九十一號まで、六回に亘りて連載)。

(二) 茲に舊日本といふのは、新領土に對して舊來の日本を指す。

## 朝鮮半島西側の地貌

理學博士 小川 琢 治

朝鮮半島を鐵道によりて旅行するもの、慶尙道

より全羅忠清兩道に入りて感ずる所は地貌の秋風嶺以東と以西に於ける著しき反襯なり。秋風嶺以東に在りては山間の豁谷急斜面を成し谷底深く谷道V字狀の断面を成すに反し、其以西に入れば豁谷兩側の斜面は濶く鈍くして谷底は凹字狀に近き断面を成すを其最も顯著なる差異とす。慶尙道の西界金泉より忠清道南端の沃川に至る間の地帯は此の地貌の限界に當る漸移地域にして、鐵道の海拔高度と兩側の山嶽との高度の差著しからず。此の慶尙道即ち洛東江流域の地貌は日本内地と同じく、慶州街道の如き著明なる直線狀の罅谷 (Gorge Valley) なども認められ、其の地貌成因の要素として地盤其ものゝ變動が重要な役割を演ずること小藤博士の夙に指示せられし所なるが、之に附隨して表面を削磨する浸蝕作用が第二の要素として盛んに活動し又た今尙ほ活動しつゝあるを信ず。西側の地貌に至りては内地の比較的新时期の被覆層